

漱石全集
第二十九卷

書簡集

三

全三十四卷 第二十九回配本

昭和三十三年七月二十七日 第一回發行 © 漱石全集 第二十九卷
昭和三十四年一月十日 第二回發行 定價 一五〇圓

著者 夏目漱石

發行者 岩波雄二郎

印刷者 山田一雄
東京都青梅市根ヶ布三八五番地



發行所

東京都千代田區
神田一ツ橋三ノ三 株式會社

岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

精興社印刷・三水舎製本

目次

明治四十一年

三

明治四十二年

五

明治四十三年

一〇三

書簡番號索引

三

解 說

一六三

注 解

一七五

明治四十一年

八四九

一月八日(?) 牛込區早稻田南町七より 本郷區森川町一

小吉館小宮豊隆へ〔はがき〕

拜啓また御迷惑ながら明日早く来て野田先生の處へ原稿をもつて行つてくれ玉はぬか。「坑夫」は諸君子妨害の爲一向不進歩

八五〇

一月十日 金 後2—3 牛込區早稻田南町七より 麴町

區富士見町四丁目八高濱清へ

昨日は失敬斑*女には大弱り〔に〕弱り候。楮本朝本間久と申す人別紙原稿をよこしホト、ギスカ中央公論へ

周旋してくれぬかとの依頼故先づ以て原稿を供貴覽候御氣に入り候はゞ御掲載の榮を賜はり度候

本人の申條に曰くある雜誌記者曰く本間久は翻譯ばかりして創作は出来ぬ男だと是に於て此作ありと、即ち敵愾心の結果になれるものと覺候

原稿の價値は大したものにあらず少々物足らぬ様也然し折角の希望故御紹介致し候 以上

正月十日

金

虚子方丈下

八五一

一月十日 金 後11—12 牛込區早稻田南町七より 本郷

區森川町一小吉館小宮豊隆へ〔はがき〕

拜啓又御願が出来候。今日坑夫氏來り又話を聞いたら僕の間違を發見した。シキと申すのは坑の事を、銅山の構内と思ひ違へて無暗に使つたから、大に恐縮して正誤しやうと思ふんだが、君もう一遍九浦先生の所

へ行つて原稿を持つて来てくれ玉へ。尤もシキと云ふ字の出初めは銅山へ着したすぐ前からだから此間の原稿の仕舞の方になる。回数ちや一寸分らないが、何でも長藏さんが坑夫に向つて「左りがシキだよ」と云ふ所がある。そこからさきを貰つてきてくれ、ばい。是は仕舞の方だから一寸持つて歸つても野田君の迷惑にはならない。それから、すぐ直して又持つて行つてもらひたい。どうも度々君子を煩はし奉つて恐縮千萬

八五二

一月十四日 火 後0—1 牛込區早稻田南町七より 神田區上白壁町五天續畫塾野田九浦へ

拜啓坑夫插畫校正刷二葉御惠投にあつかり拜謝致候二葉とも頗る上出来甚だ面白く拜見致候あれは今迄のうちにて尤も成功せるものかと迄思ひ候紙もあの方遙かに品よろしく候實は大阪の新聞を切りぬき繪入記念

にまとめ居候がもし校正刷の方頂戴出来候へば其方を貼り付ける事に致し度と存候右御禮旁御願迄匆々不備

正月十四日

夏目金之助

九浦 先生

「坑夫」はことによると七十回以上上るやも計りがたく御迷惑とは存じ候へども何分よろしき様願候

八五三

一月十九日 日 (時間不明) 牛込區早稻田南町七より 神田區上白壁町五天續畫塾野田九浦へ

御書拜見校正刷度々御廻付にあつかり難有候いづれも見事に拜見致候右御禮迄申述候 頓首

十九日

金之助

野田 様

八五四

一月二十日 月 後3—4 牛込區早稻田南町七より 横

濱市元濱町一丁目一渡邊和太郎へ

拜啓御惠投の鑑詰今日着段々の御好意深く奉鳴謝候
小子疎慵常にいづ方へも御無沙汰ことに舊臘より例の
小説をたのまれたる上三女とも病氣にて病院開業の有
様ほとんど閉口今以て看護婦を一人頼み居候始末厄介
無此上候大兄も御病氣の由然し大した事にも無之趣先
以て安心然し御養生專一と存候淺井畫伯は惜しき事致
候小生いつか同君の水彩を楯間にかけて度と存居候ひし
にまだたのみもせぬうちに故人となられ候。家がない
から晝などたのんだつて駄目だと思つてるうちに晝の
方が駄目に相成候。同君歸朝後の事業半途にて遠逝晝
界のため深く惜むべき事に候不折もよろしからぬ由心
痛致候小生も本年は四十二の厄年故どうなるか知れず。
例の胃もよろしからず候

御惠投の鑑づめは平生参り候諸君子へすゝめて一餐
の快をともにする積に候

坑夫かき上げる迄は氣がせいにてなまけてゐながら忙
しく困居候

先は右御禮秀雜況迄 匆々頓首

正月二十日 金

渡 邊 様

八五五

一月二十二日 水 後1—2 牛込區早稻田南町七より

小石川區久堅町七四菅虎雄へ

拜啓其後は御無沙汰小説がまだ濟まないんで何處へ
も出ない。時に僕例の胃病で一才醫者に見てもらつた
ら小便を試験して是は糖分があるといふコイツには參
つたね。それで自宅には器械がないから糖分^{*}ノペルセ
ントを大學で調べてもらつてくれろといふんだがね。
僕の療治法は其ベルセントで極るんださうだ。そこで

色々頼む人も考へればあるが君の親類の人に見てもらつてくれないかな。承知して呉れるなら時間と日どりを極めて小便をビールの瓶に入れて大學へ持たせてやる早い方が此方の便宜だ否や御廻答を願ひます

それから去月から病人ばかりで今は小供が口腔炎とかいふものを煩つて口が腫れてヒー／＼泣いて氣毒でたまらない。此泣聲をきくと小説が一枚も書けなくなる。そこへ妻が寐ちまつた。仕方がないから看護婦を二人又雇つた。それでも雇へる丈が幸福だ

君のうちの病人は如何御大事になさい 以上
二十一日 金之助

虎 雄 様

八五六

一月二十四日 金 後0—1 牛込區早稲田南町七より

芝區高輪南町三〇中牟田方中村翁へ

拜啓先日は失敬。三四日前小生方へ別封をよこした

るものあり書中の人は君の近所のもの故入御覽候。尤も新聞の種になるや否やは知らず候 以上

二十四日

金之助

中村 翁 様

八五七

一月二十六日 日 (時間不明) 牛込區早稲田南町七より

下谷區西黒門町二丁目一高橋方市川文丸へ

拜啓先夜は失禮其節は好物御持參御蔭にて諸君子一夕の歡を添へ申候十和田山諸景寫眞數葉是亦御親切に御寄贈難有御禮申上候豊年祭は面白き事と存候出来るなら御供致し度然し種々用事も控居候事故是非の御約束も仕かね候先は右御禮迄 匆々頓首

一月二十六日

夏目金之助

市川文丸様

八五八

一月二十八日 火 後2—3 牛込區早稻田南町七より

横濱市元濱町一丁目一渡邊和太郎へ

拜啓別紙の様なもの、捌き方をたのまれ候

もし慈善兼御保養の御覺召もあらば御出被下度候。

もし御いやなら其儘御打棄置願上候

岐阜訓盲院といふ^原小生友人の父なる人の創立せるも

の此男中年明を失ひ此事業に従事。今回の事はおもに

其薰陶を受けたる人の發起に候。先は用事迄 勿々

一月二十八日

金之助

渡邊和太郎様

演藝會は六日八日の兩日のごよみに兩日の

分二葉宛差上候もし御入用ならそれを御取りあとは

御都合にて小生方へ御返し被下るか又は賣りつけて

被下候へば猶難有候

八五九

二月一日 土 後11—12 牛込區早稻田南町七より 府下

大久保仲百人町一五三戸川明三へ

拜啓本日は久々にて參上致候處御留守にて不本意千

萬に存候玉稿^原薄謝ながら社より封の儘相届候につき御

査收願上候

夫から例の朝日文學欄につき玄耳氏と篤と相談致た

る處此三四月に至り紙面擴張の意見實行出来れば附録

ごとに文學もの入要なれどそれまでは閑文字の入れ所

なき由に候

小生も右文學欄の出来るのを待ち居候へども是は單

に編輯者の一存故主權者の方ではどうなるやら分らず

候

もし左様の改革も實行出来候曉には先日御話しの通

小生知人に依頼面白きもの書いて頂き度と存じ居候其

節は是非御盡力相願度と存候

先づ夫迄は小生は先日申上候位のナマニエの體で打

過ぎる了解故大兄も御投稿は一先づ御控え被下度候

先は右用事迄 勿々

二月一日

金之助

秋骨老兄

御令聞より拜聞の上歸途横井氏の門内に這入り申候未だ赴任なき由故遠慮して家のなかは見ずに參り候

八六〇

二月四日 火 後5—6 牛込區早稻田南町七より 牛込

區大久保余丁町馬場勝彌へ

拜啓本日趣味を一寸のぞき候處例のリードルの件と思ひの外小生の人格に對し大々の御辯護の勞を辱ふし甚だ嬉しく候實は小生も云へば云ふ事はいくらでも候へども白雲子なるものゝ態度傍若無人故相手になるのを差控へ候始末。然しあれに對しそれ程の御同情を得んとは存じも寄らず。一兩〔度〕御目にかゝり候のみにて小生の心事深く御承知なき昨今別して知己の感に堪へず。茲に謹んで御禮を申述候

先日御紹介の早稻田學生に面會來意も判然其うち御邪魔にまかり出度と存候先は右迄 匆々

二月四日

金之助

孤蝶様

侍曹

八六一

二月四日 火 牛込區早稻田南町七より 本郷區駒込西片

町一〇瀧田哲太郎へ

拜復文學評論につき御申譯承知致候徹夜にては恐れ入候適當の所にて御まとめ願上候

虞美人草は既にとくの昔より一冊も無之先般御申込の節も既に出拂の姿に候へばあしからず

夏目漱石論が來月の中央公論に出る由聊か恐縮致候。先達中より大分漱石論が出て申候。もう澤山に候。出來得べくくんば百年後に第二の漱石が出て第一の漱石を評してくれゝばよいとのみ思ひ居候

坑夫御氣に召さぬ由已を得ざる次第に候。九十六回にて完結致候尤も東京朝日では祭日休刊を補ふ爲め二回一所に載する事ある故九十三回位にて終る事と存候 先は右迄

二月四日

夏目金之助

瀧田 樗陰様

八六二

二月五日 水 後2-3 牛込區早稻田南町七より 神奈

川縣大磯角半方渡邊和太郎へ〔はがき〕

拜啓御病中をも顧みず御無禮の事相願恐縮の至。大磯では例の切符も何の御役にも立つまじく甚だ御氣の毒に存候。昨今の御模様如何に御座候や。折角御養生專一に候。先は御禮迄 匆々頓首

八六三

二月七日 金 牛込區早稻田南町七より 牛込區早稻田南

町四森卷吉へ

啓上

御老人御逗留定めて御多忙の事と存候例の切符は先方の人大磯へ病氣療養の轉地中にて賣り損へり。然し御愛嬌に一枚は買つて呉れ候。小生も一枚頂戴致候

土曜には參る筈なれど小宮が行きたさうだから切符をやり申候あゝ云ふ處は若い人の方が出席する資格多きかと存じ割愛致候

此次の木曜に寶生氏を頼む積なり。尤も三時頃からみんなが來て遊ぶ由御出待ち候

切符代は大磯より爲替のまゝ差上度どうか御面倒ながら御受取願度夫から小生の分は現ナマにて封じ入候御落手願候

御老人へ御挨拶の爲め參上致す筈の處御混雑中と云ひ且つ御迷惑と存じ差控居候あしからず御容赦

先は右迄 匆々

二月七日

金之助

森 卷 吉 様

右の外に訓盲院の爲めに寄附金など御募りの計畫
あらば多少は喜捨仕るべく又發起人として送附を受
けたる切符四枚購買の義務有之ば無論あと二枚は受
持可中御遠慮なく御申聞被下度候

八六四

二月七日 金 牛込區早稻田南町七より 麴町區富士見町

四丁目八高濱清へ

啓上謠本五冊わざ／＼御持たせ御遣はし御懇切の段
感謝致候小生萬事不案内につき御仰の通り寶生先生と
相談の上御指定のうちを願ひ可申候今夜班女は少しに
て濟む事と存候もし御都合もつき候へば御入來御兩人
にて一番御謠あらまほしく候 先は御禮迄 勿々

二月七日

金

高 濱 様

八六五

二月十日 月 後3—4 牛込區早稻田南町七より 芝區
白金志田町一五野間眞綱へ

拜啓其後は御無沙汰小生も小説をかい仕舞ふと其
間にたまつた用事を片付けねば(な)らず片付けてゐる
とあとからすぐ雑誌やら何やら追かけてくる實に身體
丈は閑であたまは多忙を極めてゐるのでついどこへも
出でず昨日久しぶりで十二社へ行つて夫から銀世界を
廻つて歸つて來た。梅は二三本開いてゐた。

妻君を國へ御歸しの由承知それで地方へ出かせぎの
件も承知。^{*}小島へ依頼の件も承知萬事承知致候。是か
ら此墨で手紙を十數通(端がきとも)かく。其内で小島
氏へも認める所也

坑夫は面白い由面白ければ難有い仕合せ。處美人草
はわからぬ由是は少々困つた事也。もう少し賞めても
らひたい。高田が報知でほめてくれた。逢つた時よろ

しく願ひます。

今度の木曜に来るなら皆川君と來ぬか。(午後より) 晩には寶生新が來て謠をうたつてみんなにきかせる筈。

君謠がきらひなら仕方がない。

野村のうちは多勢御客があるさうだ 以上

二月十日

夏目金之助

野間眞綱様

八六六

二月十日 月 後3—4 牛込區早稻田南町七より 松山

市松山中學校小島武雄へ

拜啓漸々春暖の候に相成候處愈御清勝奉賀候却説御知り合ひの英文卒業生野間眞綱事情あつて地方へ出かせぎに參り度由にて大兄の三月限り松山を去らるゝ由を傳聞しどうか小生から其後任として推擧ある様依頼致候につき御手紙を差上る事に相成候

もし大兄の退松が事實に候はゞどうか野間君を御周

旋願度ものに候。同君は御存じの通の好人物學問も小

生保證致し候。履歴は陸軍士官學校、明治學院其他の

英語教師に候

先は右御願迄 匆々

二月十日

夏目金之助

小島武雄様

八六七

二月十日 月 後3—4 牛込區早稻田南町七より 神奈

川縣小田原在早川村清光館林原(當時岡田)耕三へ

拜啓過日御出京の砌は御忽々にて失禮其節橋本醫士の診斷にては肺部に異狀もなき由何よりの事此上は頭の方を精々御療養御歸京相成度候小生の糖尿もさしたる事も無之比例は〇・二に候へば當分死ぬ恐も無之候。大いなる蒲鉾わざ／＼御送難有御禮申上候來る木曜には諸君子弊廬に會する約あり一きれ宛みんなに振舞はんと存候先は右迄 匆々

二月十日

夏目金之助

岡田耕三様

演舌今日之を通讀問題が大に似たる處有之興味を感じ
申候 以上

八六八

二月十日 月 後3—4 牛込區早稻田南町七より 府下

巢鴨町上駒込三八八内海方野上豊一郎へ〔はがき〕

此次の木曜には諸君子三時頃参りてごたくに飯を

くふ由。晩には寶生氏美聲にて三山實盛を謡はれ候

二月十日

二月十七日 月 後11—12 牛込區早稻田南町七より 芝
區白金志田町一五野間眞綱へ

八六九

二月十六日 日 後3—4 牛込區早稻田南町七より 麴

町區富士見町四丁目八高濱清へ

拜啓青木健作氏論文拜見致候ホト、ギスへ掲載之儀

は如何様にてよろしかるべきか是非共のせるべき程

の名論文とも存じ不申然し載せてはホト、ギスの資格

に害を與ふるとは無論思ひ不申候。昨日青年會館にて

二月十五日^原

夏目金之助

高濱老兄

八七〇

拜啓本日小島氏より返事到來一足違にて後任相きま

り御氣の毒の由後任は深江種明の由に候。故に君がも

し越後高田を望むならば小島よりすぐに掛合ふ故電報

(可相成)にて小島氏へ依頼ある様申來り候。萬〔一〕越

後の校長深江を手放さぬか又は松山難治の爲め深江の

方で辭退すれば直ちに大兄を推舉可致旨に候。先は右

御答迄 勿々頓首

野間眞綱様

二月十七日

夏目金之助

野間眞綱様

八七一

二月十七日 月 後11—12 牛込區早稻田南町七より 大

阪市中之島三丁目西照庵野田九浦へ

拜啓西照庵へ御落付の由奉賀候校正刷毎度難有興味を以て拜見致居候東京の板屋より廻送すべき分まだ到着不仕候に付御序の節どうか御催促願度と存候先は右御禮旁御挨拶迄匆々頓首

二月十七日夜 夏目金之助

野田 九浦 様

八七二

二月十七日(四十一年?) 牛込區早稻田南町七より 小石

川區竹早町狩野亭吉へ(紹介長谷川萬次郎君)とあり)

其後は御無沙汰小生友人長谷川萬次郎氏は大阪朝日の社員で今回同紙上に世界のいろ／＼といふカツト其を毎日出すにつき大兄の許よりも何か材料を給して

もらひたい。此手紙を持參長谷川君が出たらどうぞ面

會の上委細を同氏から御聞きを願ひたい。實は僕も社

員だから自身で參上して御依頼する譯だが長谷川君の

方が此方(の)專問原だから御紹介をする。右用事迄 草

々

二月十七日 金之助

狩野 様

八七三

二月十八日 火 後3—4 牛込區早稻田南町七より 府

下巢鴨町上駒込三八八内海方野上豊一郎へ(はがき)

拜啓「御隣り」拜見仕舞の方は頗る面白く候。惜む

らくは前が左程にあらず。もつと詰めたらどうだらう。

然しあれでもいゝかも知れぬ

八七四

二月二十四日 月 後1—2 牛込區早稻田南町七より

魏町區富士見町四丁目八高濱清へ〔はがき〕

本郷區駒込西片町一〇大塚楯緒へ

朝日の講演速記は未だ參らず如何なり候にやかゝり

拜復

は中村翁に候。金曜に鼓を以て御出結構に存候。渴望
致候。ホト、ギスへ出す時には訂正致し度と存候。時
間ガアレバア、云フ者デマトマツタモノヲ書キ度候

鼓打ちに參る早稻田や梅の宵

八七五

二月二十六日 水 後2—3 牛込區早稻田南町七より

本郷區西片町一〇畔柳都太郎へ〔はがき〕

啓新米は仰の方正しからんと存候御注意難有候講演
會の筆記は朝日で出さなければホト、ギス四月號に出
る筈です夫でなければ講演集を出すさうですが多分今
度は講演集は出ますまい

八七六

二月二十九日 土 前11—12 牛込區早稻田南町七より

夫から夫へと用事が出てくるので御無沙汰をして居
ります。かねて願ひました小説は正月から掲載の筈の
處色々な事情が出来上りまして私が大阪の方へかく事
になり夫を東京へも載せる事になりました。夫が爲め
あなたの方も夫ぎりに放り出して置いた譯で甚だ申譯
がありません

一週間程前社の玄耳といふ男が旅行から戻りまして
面會の上あなたの小説の事に就て同人も心配してゐま
したんで相談の結果近日社から人を御宅へ出して改め
て願ふ事に致して置きました。其時同人の話では書き
かけて下さつたのは家庭ものだらうか夫ならば繪入の
方へ出しても御承知下さるだらうか、又一ヶ月もあれ
ば纏まるだらうか杯と申して居りました。

右の譯でありますから御葉書を玄耳の方へすぐ廻し
て社のものを御宅へ伺は〔せ〕る事に致しますから、原